中部学院大学・中部学院大学短期大学部　教育実践研究第３巻第２号(2018) 19－28

領域「言葉」における言葉の感覚が養われる教育方法についての一考察
― 学生の絵本の選書から見えてきたもの ―

橋　村　晴　美[1)]

A Study on Educational Methods Fostering Linguistic Sense in Kindergarten Curriculum Language

Harumi HASHIMURA

本研究は、「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」のひとつ（９）「言葉による伝え合い」を可能にしていくため、幼児教育においてどのような言語活動を実施していけばよいのか、その糸口として、幼稚園教諭免許や保育士資格を目指す学生を対象に、保育実践をするにあたっての絵本の選書について調査を行った。その結果、学生が乳幼児に与えたいとする絵本の条件は、知名度、シリーズ物の有無、物語絵本に集中していることが明らかになった。本研究の知見は、幼児教育における言語活動の充実化を図るため、保育者養成校が成すべき役割と課題を整理して、学生に教材研究を行わせていくことの必要性が示唆された。

キーワード：領域「言葉」、幼児教育、言語力、言葉による伝え合い、絵本

１．はじめに

2017年３月、幼稚園教育要領（以下、「要領」）、保育所保育指針、認定こども園教育・保育要領が告示された。今回の改定では、５領域の考え方や遊びを通しての総合的な保育のあり方、また全体的な計画のもとに指導計画を位置づけて、保育のプロセスを重視していく等といった従来の考え方はそのまま踏襲されており、特段、大きな変化があったわけではない。だが、幼稚園、保育所、認定こども園といった乳幼児を対象に行われている保育現場での営みが、すべての施設において共有されることが望ましいとして、３つの施設すべてが幼児教育を行う場として明記されることになった。この考えに従い、「幼児教育において育みたい資質・能力」と「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」が示され、保育現場での営みは乳児期から始まって幼児期へと続き、ここでの学びが小学校･中学校さらには高校へと伸び、つながっていくものであることが明確化された。

とはいえ、今回示された「幼児教育において育みたい資質・能力」は、従来の５領域で示されていたねらい及び内容に基づく、遊びを通した総合的な指導（活動）によって育まれるため、これまで通り、ねらい及び内容が幼児教育の目標であることに変わりはない。

「幼児教育において育みたい資質・能力」で示された具体的な内容は、１．知識・技能の基礎（豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったりする）、２．思考力・判断力・表現力などの基礎（気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする）、３．学びに向う力、人間性等（心情、意欲、態度が育つ中でよりよい生活を育もうとする）といった３つの柱によって構成されている。また、「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」は、（１）健康な心と体、（２）自立心、（３）協同性、（４）道徳性・規範意識の芽生え、（５）社会生活との関わり、（６）思考力の芽生え、（７）自然との関わり・生命尊重、（８）数量・図形、文字への関心・感覚、（９）言葉による伝え合い、(10)

１）教育学部子ども教育学科

豊かな感性と表現、等、10の力が挙げられている。

このように考えると、「幼児教育において育みたいとする資質・能力」は、乳児期から幼児期といった長期的な視点に立って達成されていくべきものであることがよくわかる。旧要領では、第２章のねらい及び内容において、「ねらいは、幼稚園修了までに育つことが期待される生きる力の基礎となる心情、意欲、態度などであり、内容は、ねらいを達成するために指導する事項である」と示されていたのに対して、新要領では、「ねらいは、幼稚園教育において育みたい資質・能力を幼児の生活する姿から捉えたものであり、内容は、ねらいを達成するために指導する事項である」と改められている。そのうえで、幼児の発達を踏まえた指導を行うにあたって留意すべき事項として、「内容の取扱い」が設けられている。すなわち、今回の改訂のポイントは、幼児教育における保育活動は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に置いて実施されなければならなく、またその際は、各領域のねらいを関連させて保育を計画し、幼児一人ひとりの違いや幼児の興味・関心に沿った環境を構成して、幼児の発達を保障していくことがより一層求められているということであろう。これらを図に示すと、図１のようになる。

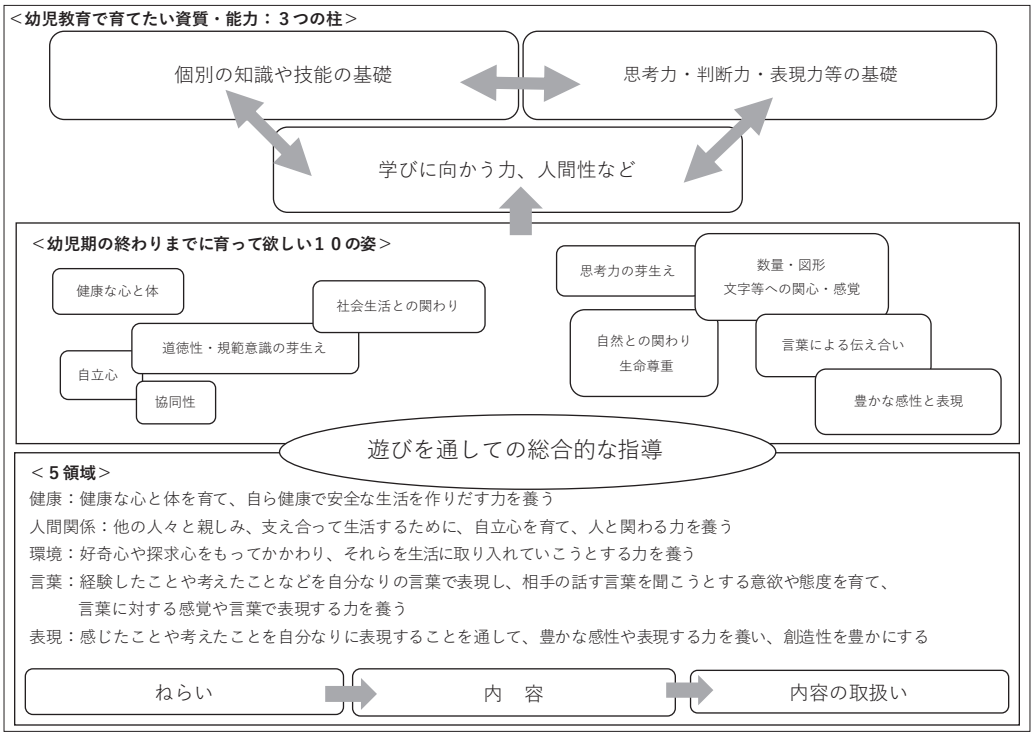

図１．改訂のポイント

出典：文部科学省　「教育課程部会幼児教育部会」（平成28年５月）配布資料３をもとに筆者作成

このような構造を踏まえて、遊びを通しての総合的な指導により、幼児期の終わりまでに育って欲しいとされる（９）言葉による伝え合いに着目して考えてみたい。前述の通り、幼児教育では各領域を相互に関連させながら幼児の指導にあたっていくため、どれかひとつの領域を取りだして指導が行われるわけではない。しかしながら、領域「言葉」のねらいでもある言葉の伝え合いを育成していくにあたり、どれだけの保育者が、ねらい及び内容の趣旨に基づいた保育を計画し、実践を行っているのであろうか。

５領域には、それぞれ３つのねらいが掲げられているが、これは心情・意欲・態度の順によって配置されている。2008年に告示された旧要領では、領域「言葉」において、「１．自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう（心情）」、「２．人の言葉や話しなどをよく聞き、自分の経験したことやかんがえたことを話し、伝え合う（意欲）」「３．日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる（態度）」

の内容が示されていた。

秋田（2009）によれば、旧要領の領域「言葉」の改訂には、ＰＩＳＡ調査による読解力の低下が大人側の危機意識に大きくはたらいていたという。そのため教育行政関係者は、これらの問題に対応するため、言語力育成協力者会議を発足させて、グローバル化・情報化する社会において、多様な人と協働し合っていく力を育成しようと、幼小中高の一貫した教育課程によって、言語力の育成や言語力活用の重視を図っていこうとする考えを打ち出したという。

つまり、領域「言葉」においては、他の４領域のように要領自体の内容を改善したり充実したりしようとするだけではなく、幼小中高を通した言語力の一貫育成の意味合いが込められているのである。そのため、幼児教育にふさわしい教育内容（聞く力の育成や言葉を交わす喜びを味わう経験）を通して、小学校以上の対話力の基礎となる言語力（コミュニケーション能力や思考力）を育成させていくことが求められているのである。

そして2017年、新たに告示された新要領では、領域「言葉」のねらいにおいて、第３の文言に、「言葉に対する感覚を豊かにする」といった文言が付け加えられ、「３．日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる」は「３．日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる」に改められることになった（下線筆者）。無藤（2017）は、新要領、領域「言葉」のねらいに「言葉に対する感覚」の文言が付け加えられたことを受け、保育者が成すべき役割として、保育者は、幼児に日常生活に必要な言葉を理解させていかなければならないが、言葉そのものへの関心（言葉の響き、リズム、新たな言葉に触れる等）を促して、言葉の楽しさ、面白さ、微妙さを感じる物語絵本を与えたり、言葉遊びの場を充実化させたりしていくことが大切であるという。

これらを踏まえ、いま現在、領域「言葉」において求められている教育的役割を整理してみると、幼小中高一貫での言語活動の充実化が求められているのであれば、幼児教育においても、３歳未満児と３歳以上児の接続を意識した絵本の与え方や言葉遊びにも目を向ける必要があるのではないだろうか。現行の小学校学習指導要領解説国語編（2008）第４章指導計画の作成と内容の取扱い　１　指導計画作成上の配慮事項　生活科や幼稚園教育との関連についての事項（６）では、「幼児期は体験活動が中心の時期であり、周りの人や物、自然などの環境に身体ごとかかわり全身で感じるなど、活動と場、体験と感情が密接に結び付いている。小学校低学年の児童は同じような発達の特性をもっており、体験を通して感じたことや考えたことなどを、常に自分なりに組み換えながら学んでいる。このような発達の特性を生かし、生活科など他教科等との関連を積極的に図ったり、幼稚園、保育所、認定子ども園における言葉に関する内容等を参考にして国語科の指導計画を作成したりすることが必要である」と、教科としての国語と幼児教育における言葉の指導を関連づけて考えていくことが述べられている。

だが、幼児教育における絵本を用いた言語活動の取組みは、未だ読み手が読みに専念すべきとして静的な鑑賞姿勢を重視する余韻論や幼児らの言語的な相互作用を楽しむ対話論等、多様な規準や実践が混在し、質的にも不安定なことが指摘されている（塚本・橋村；橋村・塚本，2011，2012；橋村・伊藤，2013）。また、幼児の言葉の育ちを意識して行う言葉遊びを保育活動として用いられている実例もあまり多くはなく、大半の保育者が、幼児の言語活動を促す取り組みとして実践しているのは、遊びや生活全体の中で子どもの声を引き出そうとしている指導に留まっていることが報告されている（梅田・伊與部；2013，2014，2015）。幼児期の終わりまでに、「言葉による伝え合い」の姿が育っていることが望ましいとするならば、３歳未満児と３歳以上児の言葉の育ちに必要な絵本を選書して、目的に沿った用い方をしていかなければならないはずである。この状態なくして、どうやって教科としての国語と幼児教育における言葉の指導を関連づけていくことができるというのであろうか。

千々岩（2009）は、言葉の指導を考える際、最も留意すべき点は語彙を定着させながら、その幅を拡げさせていく訓練を積み上げていくことだという。確かに、乳幼児の言葉の発達において、「話す」という行為は産声から、さまざまなプロセスを経て変化し、約８カ月頃に母国語としての音声模倣が始まっていく。そして、１歳前後になると、言葉とし

て発語が現れるようになるが、僅か１年足らずで、発語が現れるようになる理由はどこにあるのだろうか。岡本（2005）によれば、乳幼児期の言葉は大きく、「一次的ことば」と「二次的ことば」に分かれるという。「一次的ことば」は、生活の中に根付いている話し言葉である一方、「二次的ことば」は、話し言葉に書き言葉も加わることから、学習よって獲得される言葉であるという。

この考えに従うとすれば、幼児教育において、外国人指導者が幼児を対象に英語を指導する際、多くの場合が絵本を使用しているのは、絵本の特性である絵そのものが明確な指示機能を持っており、物と言葉の対応がされやすいからであろう。また絵本には繰り返し場面や類似場面も多いことから、幼児は先の場面といま見ている場面を結び付けて、反復学習をすることになる。こうした経験を積ませることによって幼児は多くの語彙数を獲得し、これらを自分の「一次的ことば」のベースとして定着させていっているのではないだろうか。

このように、母国語ではない言葉に触れさせていくにおいても、絵本は重要な役割を担っていることがわかる。とすれば、幼児教育においても、絵本の活用が単なる読み聞かせだけではなく、言語活動の一貫として意識された用いられ方がされなければならないのではないだろうか。今回の改訂で示された「幼児期の終わりまでに育って欲しい10の姿」のうち、（９）で示された「言葉による伝え合い」を可能にしていくには、論理的な思考が必要される。しかし、論理的思考力が言葉の伝え合いを可能にするのであれば、その思考力を支える根底は語彙力にほかならないはずである。よって、言語感覚が機能するこの時期、幼児教育においても乳児期から幼児期の接続を意識して、意図的・計画的に語彙力を定着させるプログラムを構築していくことは急務となる。

そこで本研究では、保育者養成校において、幼稚園教諭免許や保育士資格を目指す学生が、保育実践をするにあたって、乳幼児にどのような絵本に触れさせたいと考えているのかを明らかにして、幼児教育に必要な言語教育のあり方として、保育者養成校が成すべき役割と課題を整理して、言語活動を充実させていくに必要な教育方法のあり方について考察を加えることにする。

２．方　法

（１）調査方法

記述式によるアンケート調査

（２）調査及び分析対象

Ａ県Ｂ市Ｃ大学

教育学部在席で幼稚園教諭免許並びに保育士資格の取得を希望している２年生の学生57名。

前期科目「保育内容演習ⅣＡ（言葉）」、半期演習科目：2017年度前期２クラスの４コマ目の授業終了後、調査の趣旨と倫理的配慮について説明を行い、協力の意思を確認したのちに調査を行った。回収は後日の授業開始時において、直接回収した。

（３）調査期間：2017年５月

（４）調査内容

保育実践をするにあたり、乳幼児に触れさせたい絵本ベスト10（好きな絵本から順に）

（５）調査分析の方法

①タイトル、②出版社順、③作家順、④芸術家順について分析を行い、考察を加えた。また、データ分析の結果をもとに、学生の選書の特徴や問題点を整理して、保育者養成校として幼児教育に必要な言語教育のあり方について検討を行った。

３．結果と考察

（１）保育実践において乳幼児に触れさせたい絵本ベスト10（タイトル順）

学生が実習で乳幼児に読み与えたいとする絵本は、１位「はらぺこあおむし」で、全体の６割がこの絵本を選書していた。続いて、２位が「ぐりとぐら」で約４割、３位が「くれよんのくろくん」と「そらまめくんのベッド」で約３割であった（表１参照）。この結果から、大半の学生が保育実践において、乳幼児を対象に「物語絵本」を「読み聞かせしたい」と考えている様子がうかがえた（図２参照）。

順位	題名	出版社	発売日	作	絵	選書数
1	はらぺこあおむし	偕成社	2010	エリック・カール	エリック・カール	32
2	ぐりとぐら	福音館	1967	中川李枝子	大村百合子	23
3	くれよんのくろくん	童心社	2001	なかやみわ	なかやみわ	20
4	そらまめくんのベッド	福音館	1999	なかやみわ	なかやみわ	17
5	おおきなかぶ	福音館	1966	Ａ・トルストイ	佐藤忠良	14
6	からすのパンやさん	偕成社	1973	加古里子	加古里子	12
7	だるまさんが	ブロンズ新社	2007	かがくいひろし	かがくいひろし	11
	バムとケロのおかいもの	文溪堂	1999	島田ゆか	島田ゆか	11
8	どうぞのいす	ひさかたチャイルド	1981	香山美子	柿本幸造	10
9	バムとケロのにちようび	文溪堂	1994	島田ゆか	島田ゆか	9
10	バムとケロのそらのたび	文溪堂	1995	島田ゆか	島田ゆか	8
	はじめてのおつかい	福音館	1977	筒井頼子	林明子	
	しろくまちゃんのほっとけーき	こぐま社	1972	わかやまけん	わかやまけん	

表 1. 保育実践で乳幼児に触れさせたい絵本ベスト10（タイトル順）

図 2. 保育実践で活用したい絵本ベスト３

（２）保育実践において乳幼児に触れさせたい絵本ベスト３（出版社順）

学生が保育実践において乳幼児に触れさせたいとする絵本を出版社順に並べ替えてみたところ、１位は「福音館書店」で約８割、２位は「講談社」で約６割、３位が「偕成社」で約５割であった（表２参照）。その後、上位を占めている各出版社において、どのような絵本が選書されているのかを分析したところ、大半は「物語絵本」であった（図３参照）。しかし、１位の福音館書店において、せなけいこの『いやだいやだシリーズ』４部作のうち、「ねないこだれだ」が選書されていた。このシリーズの絵本は、０歳児から１・２歳児向けの子どもが母親と一緒に見て楽しむことを目的として出版された「赤ちゃん絵本」である。「赤ちゃん絵本」の特徴は、背景の描写が少なく、単体として物が取り出されたように描かれている。そのため、ここでは一般的に、母親が子どもの様子に寄り添いながら、言葉のリズムや音を絵で活かしながら言葉を交わすことが通例となっている。

つぎに３位、偕成社の中から、キヨノサチコの『ノンタンシリーズ』44 部作のうち、「ノンタンがんばるもん」と「ノンタンぶらんこのせて」も選書がなされていた。ノンタンシリーズの絵本は、０歳児向けの絵本から始まり、１・２・３歳児向けからの絵本というように、乳幼児の年齢を意識して作られた「キャラクター絵本」となっている。今回、学生が選書した絵本は、いずれも３歳児からを対象に作られた内容であった。はじめの「ノンタンがんばるもん」は、病院嫌いの子どもを主人公のノンタンと等身大に見立てて、病院嫌いを克服させようとするストーリーとなっている。つぎの、「ノンタンぶらんこのせて」は、１．２歳児の子どもが自分の気持ちをまだうまく伝えられない心情が描かれており、順番やルールに気づかせていこうとするもので、こちらもストーリー性の組み込まれた内容の絵本となっている。このことから、学生の選書はやはり物語のある絵本に目が向けられている様子がうかがわれた。

順位		タイトル
1	福音館（44）	ぐりとぐら
		そらまめくんのベッド
		おおきなかぶ
		はじめてのおつかい
		ねないこだれだ
2	講談社（32）	100万回生きたねこ
		もったいないばあさん
		ママがおばけになっちゃった
3	偕成社（27）	はらぺこあおむし
		からすのパンやさん
		すてきな三にんぐみ
		ともだちや
		手ぶくろを買いに
		ノンタンがんばるもん
		ノンタンぶらんこのせて

表２．出版社順ベスト３

図３．保育実践で活用したいと思う赤ちゃん絵本とキャラクター絵本

（３）保育実践において乳幼児に触れさせたい絵本ベスト３（作家順）

学生が保育実践において乳幼児に触れさせたいとする絵本を作者順に並べ替えてみたところ、１位の「なかやみわ」の絵本を、ほぼ全員が１冊は選書していることがわかった。つぎに２位、「島田ゆか」が約７割、３位は「エリック・カール」で約６割であった（表３参照）。その後、出版社同様に、上位を占めている作者の中から、どのような絵本が選書されているのかを分析したところ、１位の「なかやみわ」、２位の「島田ゆか」ともに、シリーズものの絵本が多く選書されていることが分かった。そのうち、１位の「なかやみわ」には、『どんぐりむらシリーズ』、『そらまめくんシリーズ』、『くれよんのくろくんシリーズ』の３つのシリーズが含まれていた。また、２位の「島田ゆか」にも、『バムとケロシリーズ』、『ガラコシリーズ』といった２つのシリーズものが含まれていた。

このことから、学生が保育現場で乳幼児に触れさせたいと考えている絵本は、シリーズものが多い様子がうかがえた（図４参照）。その一方で、シリーズ物の絵本が選書されているとはいえ、それがあまり継続されて選書されていないところから、学生は絵本の内容を精査して選書しているというよりも、知名度の高い絵本を自分の好きな絵本として選書している様子がうかがえた。

図４．保育実践で活用したいと思うシリーズ絵本

順位	作	タイトル	出版日	出版社	選書数	
1	なかやみわ	どんぐりむらのぼうしやさん	2010	学研		59
		どんぐりむらのぱんやさん	2011		2	
		どんぐりむらのどんぐりえん	2013		1	
		どんぐりむらのおまわりさん	2012	学研教育出版	1	
		そらまめくんのぽくのいちにち	2006	小学館	1	
		そらまめくんとながいながいまめ	2009		1	
		そらまめくんのあたらしいベッド	2015		3	
		そらまめくんのベッド	1999	福音館	17	
		そらまめくんとめだかのこ	2000		3	
		くれよんのくろくん	2001	童心社	20	
		くろくんとふしぎなともだち	2004		4	
		くれよんとなぞのおばけ	2009		4	
		くろくんたちとおえかきえんそく	2015			
2	島田ゆか	バムとケロのにちようび	1994	文溪堂	9	42
		バムとケロのそらのたび	1995		9	
		バムとケロのさむいあさ	1996		7	
		かばんうりのガラゴ	1997		1	
		バムとケロのおかいもの	1999		11	
		うちにかえったガラゴ	2002			
		バムとケロのもりのこや	2011		4	
3	エリック・カール	はらぺこあおむし	1976	偕成社	32	34
		ホットケーキできあがり	2009			
		パパ，お月さまとって！	2015			

表 3. 作家順ベスト 3

（4）保育実践において乳幼児に触れさせたい絵本ベスト 3（芸術家順）

学生が保育実践において乳幼児に触れさせたいとする絵本を芸術家順に並べ替えてみたところ、先の（3）保育実践において乳幼児に触れさせたい絵本ベスト 3（作家順）と同様、1 位「なかやみわ」、2 位「島田ゆか」、3 位「エリック・カール」であった（表 4 参照）。その後、上位層の選書を高い順に並べ替えてみたところ、1 位「なかやみわ」の選書に、『どんぐりむらシリーズ』、『そらまめくんシリーズ』、『くれよんのくろくんシリーズ』以外の「ばすくん」絵本が選書されていた。「ばすくん」は2007年に作者:「みゆきりか」、芸術:「なかやみわ」によって編成された「乗り物絵本」で小学館より出版されている。その後、「ばすくん」も『ばすくんシリーズ』が出版されているが、今回の調査では『ばすくんシリーズ』は、「ばすくん」以外確認されなかった。このことから、学生はシリーズものに特化されやすいが、知名度の低い絵本にはあまり興味を示さない様子がうかがえた。

順位	作者	タイトル	出版日	出版社	選択数	
1	なかやみわ	どんぐりむらのぼうしやさん	2010	学研	1	60
		どんぐりむらのぱんやさん	2011		2	
		どんぐりむらのどんぐりえん	2013		1	
		どんぐりむらのおまわりさん	2012	学研教育出版	1	
		そらまめくんのぽくのいちにち	2006	小学館	1	
		ばすくん	2007		1	
		そらまめくんのあたらしいベッド	2015		3	
		そらまめくんとながいながいまめ	2009		1	
		そらまめくんのベッド	1999	福音館	17	
2	島田ゆか	バムとケロのにちようび	1994	文溪堂	9	42
		バムとケロのそらのたび	1995		9	
		バムとケロのさむいあさ	1996		7	
		かばんうりのガラゴ	1997		1	
		バムとケロのおかいもの	1999		11	
		うちにかえったガラゴ	2002		1	
		バムとケロのもりのこや	2011		4	
3	エリック・カール	はらぺこあおむし	1976	偕成社	32	34
		ホットケーキできあがり	2009		1	
		パパ，お月さまとって！	2015		1	

表 4. 芸術家順ベスト 3

４．総合考察

今研究では、「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」のひとつ（９）「言葉による伝え合い」を可能にしていくため、幼児教育においてどのような言語活動を実施していけばよいのか、その糸口通して、幼稚園教諭免許や保育士資格を目指す学生を対象に、保育実践をするにあたって乳幼児に触れさせたい絵本の選書について調査を行った。その結果、学生が乳幼児に触れさせたいと考えている絵本は、大半がストーリー性のある「物語絵本」で、「絵本＝読み聞かせ」の傾向にあることが明らかとなった。

無藤（2017）は、物語絵本について、「最終的に５歳向けくらいで、１つの完成型が出てくるわけですが、その前の段階では物語絵本のいろいろな特定に要素を主に持っているものが多いのです。絵本の面白さは、もちろん絵の楽しさもありますが、同時に物語への導入になっている点です。児童文学は物語として完成されたものですが、絵本の場合には完成された物語への理解というのはなかなか大変なので、幾つかの要素がそれぞれ少しずつ展開されているということです。したがって絵本の魅力の１つは、物語を構成する幾つかの要素の１つ１つをいわば十分味わうことができるということが挙げられます」と述べている。つまり、整合性が無視されたストーリーであっても、幼児が次の場面を予測できる楽しみをもてるのが物語絵本の魅力だということというである。だとすれば、幼児教育で物語絵本に触れさせようとするのであれば、選書の段階において、つながりの場面がはっきりした絵本を選んでいくことが不可欠となろう。しかし、絵本には「物語絵本」しか存在しないわけではない。

新要領、領域「言葉」３　内容の取扱いでは、（３）「絵本や物語などで、その内容と自分の経験を結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにする」とある。また（４）では、「幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること」が示されている（下線筆者）。換言するとすれば、これは、言葉の感覚を豊かにするために「物語絵本」は効果を成すが、「物語絵本」だけを読み聞かせていれば言葉の感覚が育つわけではないということを表している。幼児期のうちに言葉の感覚を育て、小学校以上の学力の基礎となる言語力を育てていくのであれば、読み聞かせによってインプットされた情報をアウトプットさせていく経験も必要だということであろう。その基礎を培うためにも、絵本は目的に応じて、もっと効果的に活用されなければならないのである。

絵本は古くから幼児教育において、言語活動の補助教材として重要な役割を担っていることは周知の通りである。幼稚園教育要領解説（2008）第２章ねらい及び内容　第２節　各領域に示す事項　４　言葉の獲得に関する領域「言葉」（９）では、「家庭ではどちらかというと自分の興味のあることを中心に見たり、読んだりすることになるが、幼稚園では教師や友達の興味や関心にも応じていくもので幅の広いものとなり、家庭ではなかなか触れない内容にも触れるようになっていく。（中略）このように、幼児期においては、絵本や物語の世界に浸る経験が大切なのである」と示されている。だが、果たして本当にそうであろうか。幼児教育の場において絵本を選書し、その絵本を与えていくのは保育者である。従って、乳幼児は保育者によって選書された絵本を与えられるに過ぎないのである。保育者が絵本に対して、どのような教育的価値を見出すか、そこが欠落してしまえば、絵本は「絵本＝読み聞かせ」の方程式でしか活用されないことになる。

平山は、保育系大学生の絵本関与が「絵本志向」、「絵本経験」、「読み聞かせ志向」の３パターンに分けられるとして、日頃、読書をしていない学生は、読書をしている学生よりも絵本との接触が少ないことを報告している。今回の調査でも、幼児向けを対象とした「物語絵本」が多く選書されており、「赤ちゃん絵本」、「科学絵本」、「知識絵本」、「言葉の絵本」等といった、言葉と物を定着させて語彙数を獲得していこうとする絵本や、言葉による対話的相互作用を楽しんで、新たな語彙を獲得したり、言葉の概念を育んでいこうとする絵本に学生はあまり関心が向けられていなかった。その一方で、「物語絵本」だけは目立って選書されていたことからも、学生の絵本関与は自分の好きな絵本や過去に読んでもらった

という経験知、さらには過去の経験をもとに、それを他者にも読み与えたいとする、極めて表面的な選書であったといえよう。

これらの結果を踏まえ、幼児教育に必要な言語教育のあり方として、保育者養成校が成すべき役割について考えることにする。

絵本は本来、１対１の対応によって読み進められるものであり、集団の中で読み与えていくのは難しい。しかし、幼児教育において絵本が言語教育の必須教材として位置付けられている以上、絵本には、いろいろな種類の絵本が存在し、同時に、乳幼児が絵本から、いろいろな知識や情報を得て、それを身近なおもちゃだと感じられるような環境を与えていくことが保育者としての役割であることを理解させていく必要がある。また、乳幼児の興味、関心を捉えて、その気持ちをくすぐるような素材を含んだ絵本を選書した後、時には、疑問や問題をもたせるような問いかけをしていくことも大切である。

そのうえで、「赤ちゃん絵本」は、身近な物と言葉を対応させるだけで、乳児の気持ちを拡げる絵本だといえよう。「赤ちゃん絵本」は、１歳半向けに作成されているものを指すが、この絵本は、ごくシンプルな絵によって描かれ、ものの名前が引き出されやすいように作られている。そのため、背景など、無駄な絵が省かれ、語彙数の獲得には大きな効果を成すであろう。

また、現実と科学を統合した「科学絵本」は、乳幼児の知的好奇心をくすぐる最高の絵本だと考える。例えば、低年齢児の場合には、身近な生き物の名前と言葉を対応させるだけであっても、年齢を重ねることによって、そこに仲間があることや、いろいろな種類があること、種類によってそれぞれ名前が異なること、またそこにはそれぞれの特徴があるといった、さまざまな情報を絵本によって知ることが可能となる。当然ながら、そこには知識としての発話を促進させる可能性も秘められている。

つぎに、科学絵本のように、知識を得るものでありながら、学習としての意味合いが強い「知識絵本」の活用も有効であろう。「知識絵本」は、平仮名や数字が描かれていることが多いため、一般的には幼児向けと考えられている。しかし、これも低年齢児にとっては比較的用いやすい絵本である。言葉の楽しさを感じさせる目的として用いるのであれば、文字ではなく、絵本に描かれた絵（模様）に対して、「これなぁに？」と問いかけ、知っている言葉を引き出させればよいのである。ここにある対話的関わりは、乳幼児の興味、関心をくすぐり、次の場面を想像する力（想像力）となり、思考力へとつながるだろう。そして後に、これは自分の意思や意見を持った創造力へとつながっていくことになるのである。この考えは先述した無藤の「物語絵本」への導入にもつながっていくであろう。

つまり、言葉を紡いで自分の思いを表現していくには、言葉の基礎となる言語の獲得なくしては、「言葉による伝え合い」を可能にしていくことは不可能なのである。その基礎を培うために、絵本が幼児教育において重要な役割を担っていることは間違いない。こう考えると、保育者養成校では、幼児教育における言語活動を充実させていくため、乳児期の子どもを対象に行われている対話的な絵本の与え方を、幼児期の段階においても継続し、語彙獲得を含めた繰り返し読みを行うことの重要性に気付かせていく必要があろう。これにより、乳幼児には知識の定着が図られるが、その際、大切とされるのは、乳幼児の興味、関心を引き出す教材研究をしっかりと行わせていくことが重要となる。幼児教育ではいま、言語力育成にむけて、その基盤となる「言葉による伝え合い」の育成が目指されているが、これは学生にも必須の技能であり、領域「言葉」で求められる保育技能の基礎となる。保育者養成校としての役割は、保育者としての言語力の育成に焦点が置かれるべきであり、児童文化財の演者を志向しようとする傾向は改められるべきであろう。

引用文献

秋田喜代美（2009），「Ⅱ　幼稚園教育要領の改訂のポイント領域・言葉（新幼稚園教育要領・新保育所保育指針のすべて）」，無藤隆・柴崎正行編，ミネルヴァ書房

橋村晴美・塚本恵信（2012），「保育の質を探る試み（３）個人的基準と実践の質」，日本保育学会第65回大会

橋村晴美・伊藤健次（2013），「絵本の集団読み聞かせに関する教育心理学的考察－対話による相互作用の効果についての検討－」，幼児教育研究

紀要（25），pp27-45.
平山祐一郎（2017),「絵本への関与と絵本認知度の関係について－保育者養成における読書教育の心理学的研究」，東京家政大学教員養成教育推進室年報４，pp41-45.
文部科学省（2008),「幼稚園教育要領」，フレーベル館，p14.
文部科学省（2008),「幼稚園教育要領」，フレーベル館，p19.
文部科学省（2017),「幼稚園教育要領」，フレーベル館，p20.
文部科学省（2008),「幼稚園教育要領解説」，フレーベル館，p138.
文部科学省（2008),「幼稚園教育要領解説」，フレーベル館，p149.
文部科学省（2008),「幼稚園教育要領解説」，フレーベル館，p258.
文部科学省（2008),「小学校学習指導要領解説国語編」，p129.
文部科学省（2017),「幼児教育部会における審議のとりまとめ」，教育課程部会幼児教育部会
無藤隆（2017),「絵本の魅力その編集・実践・研究」，無藤隆・野口隆子・木村美幸著，p110.
無藤隆（2017),「幼稚園教育要領の保育内容５領域の改訂（NEWS LETTER３号)」，一般社団法人保育教諭養成課程研究会
岡本夏木（2005),「幼児期－子どもは世界をどうつかむか－」，岩波新書
高橋久子（2002),「第３部　黄金時代の開花（はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅲ　戦後絵本の歩みと展望)」，鳥越信編，ミネルヴァ書房
千々岩弘一（2009),「Ⅳ　国語科授業の実際　５語彙・語句（新たな時代を拓小学校国語科教育研究)」，全国大学国語教育学会編，学芸図書
塚本恵信・橋村晴美（2011),「保育の質を探る試み（１)「ねらい」に関する言及から」，日本保育学会第64回大会，
梅田裕子・伊與部ベサニー（2014),「言葉の力に関する保育者の意識について，人間生活学研究，p53-62.
梅田裕子・伊與部ベサニー（2015),「言葉の力に関する保育者の意識について（２）年齢への期待・活動及び援助」，人間生活学研究，pp13-26.
梅田裕子・伊與部ベサニー（2015),「言葉の力に関する保育者の意識について（３）言葉の力が生活に及ぼす影響」，人間生活学研究，pp13-26.